

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

洪水常習地域の災害文化と生活環境史
—利根川・荒川水系の地域社会を対象として—

Disaster culture and Environmental history in flood-prone regional societies along
Tone river

2014年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科

金子 祥之

KANEKO, Hiroyuki

研究指導教員： 鳥越 皓之 教授

本論の目的は、災害常習地域のフィールドワークから、災害がくり返し押し寄せる環境条件にもかかわらず、何ゆえに人びとはそこに暮らしつづけることができたのか、その理由を明らかにすることである。

第一章では、このような目的を掲げる理由を人文科学の災害研究の現状をふまえながら説明していくとともに、その際の研究視角を示すことを目的とした。現在、防災政策と地域生活との間に大きな隔たりがあることが課題となっている。本論ではこのような課題に対して、防災の理念を普及させていくのではなく、地域生活の実情をふまえた災害対応のありかたを模索していくことが大切であるという立場をとる。そのため地域社会がこれまでのように災害対応を行なってきたのか、地域社会の災害対応を検討していくことが本論の主題となっている。それゆえに、人びとの生活の立場から環境利用を分析する視角である生活環境史の方法を用いて、地域社会の災害対応（＝災害文化）を分析していくこととする。このように本論の基本的な視点を定めたいうえで、二章から五章にわたって事例研究を行なう。

第二章では、地域社会にとっての洪水とはどのようなものかを考えていくために、あえて極端な事例を選択した。一般的に言って、洪水とはすなわち水の災いであって、害悪であると考えられている。けれども洪水も自然現象のひとつであるからには、災いの側面だけでなく、恵みの側面をもってきたと考えられる。本章では、洪水のもつ地域社会にとっての恵みの側面に焦点をあてる。それによって、従来の洪水認識ではもれ落ちてしまっている洪水とのかかわり方を考察できると考えたからである。

第三章・第四章では、利根川下流域のいわゆる「輪中地帯」の人びとの災害対応をとりあげる。第二章でみた洪水とのかかわり方から、より具体的な災害対応のあり方へと考察をすすめる。

まず第三章では、災害への組織的対応に注目する。災害には、個人の力では太刀打ちできないため、組織的な共同が必要となってくるからである。しかしながら、災害へ組織的に対応しようとする、組織内における利害関係の衝突が起きてしまう。災害下であるからこそ、自己の主張をそう簡単には譲ることができなくなってしまうためである。そこで本章では、災害への組織的対応を行なうにあたって、地域社会相互の利害対立をどのように調整してきたのかを検討する。近年、災害下でのコミュニティの役割に期待が込められるようになってきている。コミュニティに期待するからには、コミュニティが抱えざるをえない利害関係をもふくめて、考察しておく必要があると判断するからである。

つづく第四章では、水神祭祀をとりあげる。この地域は二重氏子となっており、各村落の鎮守社に加えて、地域社会全体の惣鎮守社として水神が祀られている。地域社会全体が関与する惣鎮守社の水神祭祀は、水の神に洪水除けを祈念するという意味で、組織的な災害対応のひとつである。ところで災害への技術論的なアプローチをとる場合、水神祭祀は現実的な意味の極めて薄い存在であるといえる。水神を祭祀しようがしまいが、水害が有無とは何ら関係がないからである。しかしながら地域社会の人びとにとって、水の神は、

技術的対応が進んだからといって、そう簡単に捨て去ってしまえない存在である。言い換えれば、地域社会の災害対応において、水神祭祀は今なお重要な存在でありつづけている。そこでこの章では、人びとの災害対応をみていくなかで、水神祭祀がどのような役割を担ってきたのかを明らかにしたい。

第三章・第四章が複数の村落社会間の関係に注目していたのに対し、第五章ではひとつのむら（村落社会）を対象として、その災害対応のありかたを検討した。またここでは、これまでみてきた発災期の対応のあり方ではなく、予防期の災害対応を中心に検討している。行政主導の河川改修がつぎつぎと行なわれていくなかで、地域社会としてどのような判断や決定をくだしながら、地域社会独自の災害対応をすすめているのかに注目し分析をすすめる。むら主導の災害対応の論理や、そこでの課題を把握していこうと考えている。

これらの事例研究を通じて得られた知見と、それらをふまえた考察を、第六章でまとめている。人びとの災害対応を記述してくることによって、彼らに対応を迫られていた災害には大きく2種類のものがあることがわかった。ひとつめは自然が通常とは大きく異なった変化をみせる自然災害である。この場合、とくに自然と人との関係が問われることになっていた。そしてより重要なのは、ふたつ目に洪水がもたらす社会的災害である。このときには、災害が契機となって、人間相互の関係に亀裂が入ることが問題となっていた。

本論の目的は、災害常習地といわれる土地において、何ゆえに人びとはそこに暮らしつづけることができたのかを明らかにすることであった。その理由はこの2種類の災害に対応する災害文化を、人びとは形成していたからだということができる。そのポイントをまとめておく。

まず自然からのインパクトに対する地域社会の対応としては、第二章・第五章で中心的に扱った。第二章では自然の変化をうまく生かすことで、むしろ大水という契機から恩恵を得ようとする漁撈活動を描いてきた。つまり自然からのインパクトをうまく活かそうとする知恵の存在を指摘した。また第五章では、自然からの衝撃を少しでも弱めようとする、むら運営がなされていること指摘した。川が氾濫することをふまえて、“埋め合わせ可能な災害化”をはかるという、自然からのインパクトを弱める知恵の存在があった。この自然からのインパクトを弱める知恵は、洪水との折り合い方（第五章）や大水をやり過ごす知恵（第二章）というように、洪水とかかわる余地を作り出すことで被害を小さくする特徴をもっている。

つぎに災害が作り出していく相互対立については、第三章・第四章で論じてきた。第三章では地域社会の水利慣行が、関係性の破綻回避戦略となっていることを指摘した。災害の被害をもっとも受けることになる村落／村落群の存在を否定しない形で、水利秩序を形成することによって、関係性の破綻を防いできたのである。すなわち、関係性を維持していくための直接的な対応と位置づけることができる。そのように見た場合第四章では、水神祭祀という間接的な関係性維持戦略を見てきたということができる。災害が生み出す格差の問題は、根本的な解決を望みようもないものであった。そこで信仰さえも利用しなが

ら、人びとは秩序維持を行なってきたのである。その結果、水神祭祀は村落相互の対立が激化するたびに、地域全域を巡行する臨時の祭祀が営まれることになっていた。どちらも他者との関係が崩壊しないように試みる地域社会の生活実践であった。

このように本論では、災害文化を生活環境史の方法によって記述していくことにより、「災害への防禦」という視点にとらわれることなく、それぞれの地域社会がいかにして災害とかかわってきたのか、その具体的なかかわり方を分析してきた。人びとの災害対策は、自然を管理し尽くすことによって災害をなくすのではなくて、“埋め合わせ可能な災害化”をはかりながら、負の自然であるともかかわる余地を作るものであった。それゆえに、災害を組み込みながら秩序を維持していく仕組みが重要であり、社会的な共同のあり方が問われていたのであった。